

ハイデルベルク信仰問答より

問 85 天国は、キリスト教の戒規によって、どのようにして開かれたり、閉ざされたりするのですか。

答え それは、このようにしてであります。キリスト者という名前をもった者たちが、教理においても生活においても、非キリスト教的な道を歩んでいるなら、兄弟らしく訓戒を与えるべきである、とキリストは命じております。もし彼らが、自分たちの過誤や悪の道を捨て去らないならば、このことに関して、教会または教会によって定められた人々に通告され、それでも彼らが、警告の後にも改めないなら、その者たちは聖餐にあずかることを禁じられ、かくして教会の交わりから閉め出され、神ご自身によってキリストの国から閉め出されるのであります。しかし、もし彼らが真の改心を約束し示すならば、再びキリストの肢、また教会の肢として受け入れられるのであります。

今回で「教会戒規」についての学びは最終回となります。まとめとして、地上の教会における戒規の執行が天国の門に対してどのような影響を及ぼしているかについて考えます。

「答え」の内容を丁寧に見ていきますと、ここでは戒規の執行に先立つ一連の手続きが示されていることが分かるでしょう。その順序は主イエスの教えに基づいています。

「きょうだいがあなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところでとがめなさい。言うことを聞き入れたら、きょうだいを得たことになる。聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の人の証言によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい。よく言うておく。あなたがたが地上で結ぶことは、天でも結ばれ、地上で解くことは、天でも解かれる。」(マタイ18:15-18)

ここで主イエスが教会に求めておられる順序は以下のようになります。

兄弟（姉妹）が罪を犯していることを知ったら…

① 二人だけのところで咎める

二人だけでは埒が明かないようなら…

② 二、三人で説得する

二、三人での説得にも応じなければ…

③ 教会会議にかける

それでも聞き入れないならば…

④ 異邦人か徴税人と同様に見なす（つまり、未信者と同等の扱いとする）

「キリスト者という名前をもった者たちが、教理においても生活においても、非キリスト教的な道を歩んでいる」とは、どういう状況でしょうか。様々な問題が想定されますが、「教理においても」とは異端や異教に傾倒すること、「生活においても」とは不品行や不正や暴力などを指すと思われます。

#### ① 二人だけのところで咎める

「兄弟らしく訓戒を与えるべきである」とは、見て見ぬふりをしてはいけないということであり、それは神の御前に問われるということです。大学時代、仲間の罪を知ると聖書を持ってその人の部屋に行き咎める人がいました。彼は若くして既に牧会者でした。

#### ② 二、三人で説得する

#### ③ 教会会議にかける

「もし彼らが、自分たちの過誤や悪の道を捨て去らないならば、このことに関して、教会または教会によって定められた人々に通告され」の部分を読むと、②を通り越してしまっているようにも見えますが、それは暗黙の前提となっているはずで、教会会議の場で罪が明らかにされるのは当事者にとっても辛いことですが、悔い改めの態度が見られず生活が変わらないのであれば、やむを得ぬ措置とせざるをえなくなるでしょう。

#### ④ 異邦人が徴税人と同様に見なす（つまり、未信者と同等の扱いとする）

「それでも彼らが、警告の後にも改めないなら、その者たちは聖餐にあずかることを禁じられ、かくして教会の交わりから閉め出され、神ご自身によってキリストの国から閉め出される」というのは、最終的な判断であり、ここでようやく「陪餐停止」が出てきます。このことは一時的に「教会の交わりから閉め出され」ることであり、「神ご自身によってキリストの国から閉め出される」という恐ろしい状態です。当事者は「救われた人々の共同体」の外に追いやられるという、暗闇を経験することになります。

主イエスが弟子たちにここまでの指導をされたところには、どんなに説得しても頑として聞かない人がいることを知っておられたからでしょう。その人の心に聖霊が働かれなければ、悔い改めることはできないのです。その人の内に聖霊がおられるなら、その語りかけに応答することができるはずで、

「しかし、もし彼らが真の改心を約束し示すならば、再びキリストの肢、また教会の肢として受け入れられるのであります」ということばでもって本問答が締め括られるところには、戒規の目的が、罪を犯した人の回復であるということを再確認する意図があります。大切な神の民の一人が減びることを主は望んでおられず、主のからだに属する人々も主と同じ心になってその人のために祈るべきことが教えられています。裁いて終わりであるならば、それは「赦しの共同体」ではないでしょう。つまりいた人の回復を願うことこそ、まことの愛の共同体なのです。